The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	趙岐撰『孟子章指』の輯佚
Author(s)	杉山, 一也
Citation	中国研究集刊. 1988, 6, p. 15-19
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60805
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

趙岐撰『孟子章指』の輯佚

杉山一也

(一)

本稿は後漢の趙岐の「孟子章指（および篇敘）」に対する輯佚作業を素描したものである。

「孟子章指」とは、趙岐が『孟子章句』を著す際、『孟子』各章の最後にその章の要旨を述べたものである。従って「孟子章指」は書名ではなく、本来『孟子章句』の一部である。この「章指」はほとんどが四字句で構成されており、句末はしばしば押韻している。

ところが、「章指」は唐から南宋までの間に刪去されることになる。錢大昕（一七二八―一八〇四）は次のように言う。

南宋の後、僞『正義』出づ。名を孫奭撰する所に託して、盡く「章指」の正文を刪り、仍ほ其の語を剽掠して「正義」に散入す。明の國子監、『十三經』を刊するとき、此の本を承用し、世 遂に復た趙岐の元本を見ざるなり。（『十駕齋養新録』巻三「孟子章指」）

僞孫奭撰『孟子正義』を見ると、確かに、刪られた「章指」が「疏」の冒頭にそれぞれ組みこまれている。もっとも、小林俊雄氏の「広島大学蔵殿版注疏の校字に就いて」（廣島支那學會『支那學研究』一一・一九五四年）によれば、「章指」全文が各章疏首に組みこまれているとは限らず、「章指」最初の数句を「疏」首に組みこみ、残りの「章指」に改竄を施して「注」中に組みこんでいることもあるという。

さて、誰が「章指」を刪ったかについては三説ある。

㈠、陸善経（唐初の人）説

㈡、『偽孫疏』作者説

㈢、『偽孫疏』校刊者説

㈠の陸善経説は、錢大昕が前掲『十駕齋養新録』の続きに『崇文總目』を引いて述べている。

考ふるに、『崇文總目』 陸善經注『孟子』七卷を載せ、稱すらく、善經 趙岐が「章指」と其の「注」の繁重なる者とを刪去して、復た七篇と爲すと。『文獻通考』に見ゆ。是れ「章指」を刪去するは善經に始まるなり。邵武の士人

『疏』を作るや、蓋し善經本を用ふるならん。（『十駕齋養新録』巻三「孟子章指」）

つまり、「章指」を刪ったのは陸善經であり邵武（福建省）の士人（朱熹が言う『偽孫疏』作者）が其の陸善經本を底本にして『疏』を作った、とするのである。

㈡の『偽孫疏』作者説は、盧文弨などが唱えている。盧文弨（一七一七―一七九六）は、

孫宣公（孫奭の諡）『孟子疏』を僞作せる者、其の〔「章指」の〕文を掠取して「疏」首に入ると自も、又全くは載する能はずして更易する所多し。（『抱經堂文集』巻二「孟子章指序」）

と述べている。孫志祖（一七三七―一八〇一）や阮元（一七六四―一八四九）なども同説である。

㈢の『偽孫疏』校刊者説は、孔繼涵などが言っている。孔繼涵本『孟子趙註』序に、

「章指」の亡ぶは、校刊者の自用（独善）に果〔断〕なるに由るのみ。（『湖海文傳』巻二一「孟子趙註序」）

とある。『偽孫疏』では「章指」という出拠を明記せずに引用されていたに過ぎず、「注疏」という形態で校刊した者が、それを知らずに独善的に「章指」を削ったのだ、とする説のようである。小林俊雄氏の前引論文も、校刊者刪去説を採っている。

このようにして、朱熹の『孟子集注』や、(偽)孫奭『孟子正義』が尊重され広く行われるにつれ、趙岐の「章指」は、「篇敘（趙岐の跋）」とともに世人に知られなくなっていった。

しかし、明から清の書誌学者がこの事実に気づき、「章指」及び「篇敘」の輯佚を始めることになる。

（二）

現存する「章指」を備えた主要刊本の淵源及び所蔵過程について一瞥する。

（a）宋大字本

『四部叢刊』に収められており、趙岐『孟子章句』の最善本といわれる版本である。小林俊雄氏の「四部叢刊本孟子源流考」（廣島支那學會『支那學研究』二四・二五合併號・一九六〇年）によると、この本は、北宋の真宗の大中祥符七年（一〇一四）國子監本系統であり、この版本自体は南宋の孝宗間（一一六五―一一八九）、または光宗間（一一八九―一一九四）に刊行された翻刻本（覆北宋本）というのが通説のようである。

そして、元の至正年間（一三四一―一三六七）に松江の儒学官の書籍となり、明代には李開先（一五〇一―一五六八）の蔵書となる。彼は「性　書を蓄ふるを好み、李氏蔵書の名　天下に聞こゆ」（『明史』巻二八七）といわれるほどの蔵書家で、宋大字本は序跋や題識に「章丘李氏蔵北宋蜀大字本」としてしばしば現れている。

その後、明末から清初にかけて梁清標（一六二〇―一六九一）の蔵書となる。この時期に毛扆（一六四〇―？）や何焯（一六

六一―一七二二）などの書誌学者達が、この本に基づいて校録したり影鈔したりしたようである。

もっとも、高橋智氏「「韓本」孟子趙注について」（『汲古』一二・一九八七年）は、「梁氏蔵宋本と李氏蔵宋本とは同じではあり得ない」と述べているが、小林俊雄氏が「清家本孟子テキスト考」（『日本中国学会報』三一・一九七九年）注(12)などで指摘しているように、やはり同一の書籍と考える方が妥当なように思われる。

続いて梁清標の孫の梁用梅の書架に移った。孔繼涵（一七三九―一七八三）は、彼からこの書を借りようとしたが、借りることができなかったようである。そして、王國維「内府蔵宋大字本孟子跋」（『観堂別集』巻三）に拠ると、乾隆中、四庫全書館を開く時に梁氏によって献上され、内府に入ることになった。しかし、著録はされず、『四庫全書總目』にも見えていない。この後、一九一九年に上海涵芬樓が借り出して縮印したものが『四部叢刊』に収められ、さらに一九二三年、同じく涵芬樓が影印したものが『續古逸叢書』に収められている。

この書が現在どこに所蔵されているかは未詳であるが、孟森（一八六八―一九三七）が一九三五年に「宋槧大字本孟子校記」（「國立北平圖書館館刊」第九巻第四號・第五號・一九三五年）を著しており、少くともそのころまでは（恐らく國立北平圖書館に）現存していたことになる。

（b）元旴郡重刊廖瑩中世綵堂本

世綵堂は、廖瑩中の書室名である。彼の生没年は未詳だが、南宋の賈似道（一二一三―一二七五）の客となった人物である。廖瑩中が刊行した宋本を元代に旴郡において重刊した版本であるが、詳しいことはよくわからない。ただ一九八五年に台北の故宮博物院によって出版された『景印元覆宋世綵堂本　孟子趙注』の昌彼得氏の跋に拠ると、この書は毛晉（一五九九―一六五九）、毛扆（一六四〇―？）の旧蔵書であったことがわかる。また劉建国『中国哲学史史料学概要』（吉林人民出版社・一九八三年）に拠ると、一九三二年に北京の故宮博物院によって影印されたこともあり、それは『天禄琳琅叢書』に収められている。そして、一九八五年に台北故宮博物院によって影印され、現在も故宮博物院が所蔵している。ちなみに元覆宋世綵堂本『孟子趙注』としては、故宮博物院にこの一帙が残っているだけだという。

（c）その他

その他には、山井鼎（一六八一―一七二八）が『七經孟子考文竝補遺』を著す際に参照した足利本系統の本が足利學校遺蹟圖書館に所蔵されている。また、『吉石庵叢書』（『羅雪堂先生全集』）初編所収）に影写されている、日本南北朝覆宋小字本『音注孟子』も、東洋文庫や大東急記念文庫などに現存している。

（三）

「章指」輯佚には、以上に述べた諸本の他にも参照している版本・鈔本があるが、主要と思われるものは、やはり(a)宋大字本と(b)元覆宋世綵堂本との二本、あるいはその二本からの校録本である。

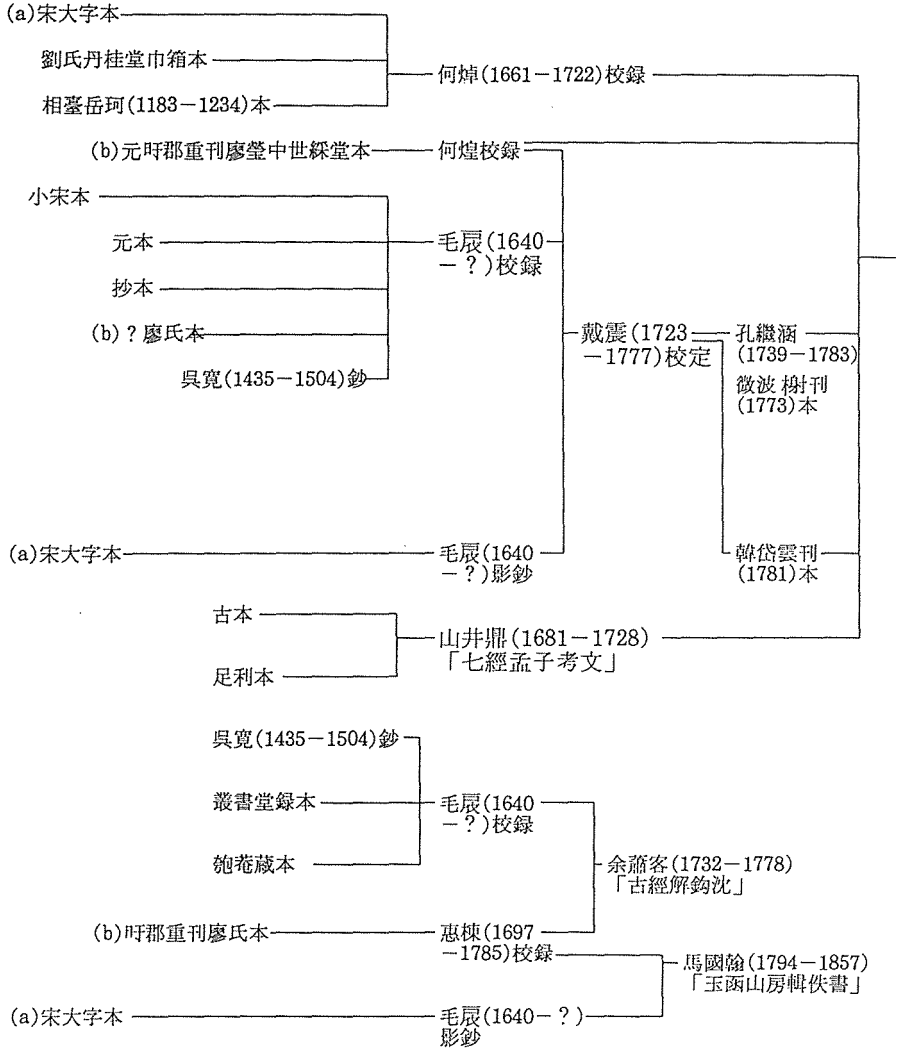
そこで、(a)本(b)本の伝来と、明清諸家の輯佚過程を図式化すると本稿末尾に置く図のようになる。これを見る限り（呉寛がいかなる本から校録したかは分からないけれども）、何焯、何煌、毛扆、惠棟らが依拠している本は、主として(a)本と(b)本とであることが言えよう。

阮元(1764－1849)校勘
――――――「孟子注疏校勘記」

最後に、周廣業（一七三〇―一七九八）の輯佚作業を挙げる。焦循（一七六三―一八二〇）の『孟子正義』の場合、経注の底本としては孔繼涵本を採用しているが、「章指」の底本として周廣業の『孟子章指考證』または『疏證孟子章指』といわれるものを採用している。焦循は「章指」の疏の中でしばしばこの書を引用しており、「孟子章指」の研究には非常に重要な著作だと思われるが、未見である。本田濟氏の「趙岐『孟子章句』について」（『池田末利博士古稀記念東洋學論集』・一九八〇年）が「章指」を引く際にも言及されていない。ただ、周廣業が宋本から「章指」を校録したという記録はいくつかあり（清の呉壽暘『拜經樓蔵書題跋記附録』巻一や、『上海圖書館善本書目』巻一など）、彼はそれをもとにして『孟子章指考證』を著したものと思われる。

伝　来

(a)宋大字本－元至正(1341－1367)松江儒學官蔵－李開先(1501－1568)蔵－梁清標(1620－1691)蔵－梁用梅蔵－清内府蔵－?

(b)元吁郡重刊廖瑩中世綵堂本－毛晉(1599－1659)蔵－毛扆(1640－?)蔵－臺北故宮博物院蔵

輯佚過程